

謹弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

村田秀雄 氏 萩市医師会 6月10日 享年 86

編集後記

私には隠している（隠された）記録がある。

外国産カブトムシの飼育ギネスホルダー、すなわち現日本チャンピオンの一人なのである。

フフフ・・・。

話は今を遡ること20数年。世間はミレニアムに沸いていた、西暦2000年のこと。（その前年の1999年は、知る人ぞ知る、外国産カブトムシ・クワガタムシの輸入が一部解禁となった年である。時の総理大臣は小淵恵三氏）

場所はマンションの一室。ブーン。小バエが鼻に飛び込み、そのむずがゆさで目が覚める。部屋の中には、天井近くまで積み上げられた昆虫の飼育ケースが、ただでさえ狭いワンルームマンションに所狭しと並んでいる。つい最近まで、観賞植物が窓際に飾ってあるような、独身男性としては、まあそれなりにきれいな部屋だったはずである。どうしてこんなことになってしまったのだろう。

さらに時を遡ること数か月。大学時代に乗馬部であった、という後輩の研修医に誘われ、数人で関東の某地へ乗馬に行った。もちろん自分には乗馬という高尚な趣味はない。後にも先にもその時一度限りである。人生はじめての乗馬は、なかなか怖いものがあったが、大げがをしない程度に何とか終わることができた。じゃあ、そろそろ帰ろうかねえ、という時、乗馬のコーチが、「そういえば、厩舎に（国産）カブトムシの幼虫がたくさんいるから、持って帰っていいよ」と言った。季節は初夏。あと約2か月ほどで成虫になるはずの3令幼虫たちが、藁の下からゴロゴロと出てくる。カブトムシは少年のころから、よく飼っていたのでなんとなく嬉しい。そしてその時の「持って帰っていいよ。」という何気ない一言が、結果的に人生の分岐点となる。お言葉に甘えて、他の研修医たちと同様に、厩の藁の中で増殖していた国産カブトムシを数匹ほど持って帰り、後期研修医控室で幼虫たちを細々と飼っていた。その様子を見た病理科の先生が、何を思ったのか、新聞のある記事を見せてくれた。「昆虫専門店大賑わい」と書かれている。昆虫専門店。そんなマニアックな店がこの世に存在するのか？早速ネットで調べると、都内だけで数十件の販売店がヒットした。その中には、そのまんま「むし社」というふざけた名前の店があるではありませんか。社会勉強のため行ってみよう。（「むし社」は、日本のむし業界を代表する会社だと後に判明。）当時、中野駅を降りてすぐ隣にあったその店の中には、何十個という飼育ケースが整然と並んでいた。中には、なんと凶鑑でしか見たことがない、少年少女あこがれ？である、本物の大きな大きな外国産カブト・クワガタたちが蠢いているではないか！！

「おおっ！でっけー。」

脳に稲妻が突き刺さったのかと思うほどテンションが上がりすぎて、思わずつぶやいた。

（この話、どうまとめるつもりか筆者にもわからないが、とりあえず次回へと続く）

（理事 藤原 崇）